



消える

古城悠



あれ、ペーパーナイフどこへ置いたっけ？

またモノが無くなった。こういうことが時々起きる。いつも使っているペンとかなら消えたりしない。でも時たましか使わないもの、それが必要になったとき、消えていることに気が付く。書類をまとめて認めを押すときの印肉だったり、改まった手紙を書く際の筆ペンだったり。買った記憶はあるのに、引き出しの中には見あたらない。

またかあ、イヤだなあ……まあいいや

独り言を言って、多佳子は机を離れた。そうして、帰宅したなり、脱ぎ散らしてベッドの上に放り出していたジャケットをスエットの上に引っかけて部屋

を出た。

マンションの1階にはコンビニが入っている。モノが消えたときには、けっこう重宝している。見あたらなくなったからといって、すぐに新しいものを買ってしまうのがイケないんだなんて、考えたことはない。消えるのはいくらでも代用がきくものばかりなのだ。だから別に気に留めたりはしていない。原因は机のまわりや部屋が片づいていないことの方が大きい。DVDを見ようかと思って、リモコンが無いやとなることなんかよくあるクチだ。そういうときはリビングのテーブルまわりに散らかっている雑誌やチラシの類をどかしてみる。するとその下から出てきてくれる（出てこないこともあるけど、そのときは見るのをヤメる）。ペーパーナイフだって、印肉だって、部屋の大掃除すると、きつと二つも三つも出てくるに決まっている。実際、会社ではあれがない、これがないと言ってイライラするようなことはない。人目につく部分だけは退社時に一通り整理するようにしているからだ。会社では起こらないのに、自分の部屋ではよくあるというのなら、その違いに原因があると考えるのが当たり

前だ。形だけとはいえ、会社では整理をしているのに対して、マンションの机まわりはそうなっていない、だからよくモノが消える。

多佳子の中では、とおの昔に結論がでていた。

真夜中のコンビニは冷たい場所だ。2時間か3時間、もう少し早かったら、空気から違って感じられる。店の前にタムロしている連中もいるし、勤め帰りにその晩の食事を買っているサラリーマン風のオジサンもいる。雑誌を立ち読みしているアンチャンの背中も、ころなしに暖かい。でも、日付が変わってそうした人々がいなくなったら、一つの波が過ぎた後の静けさに覆われてしまう。同じ場所なのに、時間帯が変わるだけに、こんなに違うものかと不思議なくらいにひんやりとしている。客が少ないだけではない。バイト君の顔つきも、退屈そうにしか見えない。切り替えスイッチみたいなのがあるのだとすれば、店の中の空気、バイト君のしぐさ、そんな全部を省エネ仕様にしてしまっているのだろう。

その夜もまた空気は寒々としたものだった。客はおらず、レジカウンターの向こう側で腰を下ろしていたバイト君がニョッキと頭をつきだして多佳子の姿を確かめただけだった。多佳子もペーパーナイフだけ買って、すぐに部屋に戻ればよかったが、気が付くと雑誌コーナーの前に立っていた。

コンビニに入ると、いつも雑誌コーナーへ行ってしまう。用がなくてもそうなる。パラパラめくってみるだけでもレイアウトデザインのアイデアが刺激されるからだなんて、後付けの言い訳だ。そんなこと言うまえに、とにかく足が向いてしまうんだから仕方ない。習慣なんだろう（条件反射かも知れない）。今日だって帰宅する際に立ち寄っているから、並んでいる雑誌はあらかじめチェック済みだ。それなのに、また来てしまった。それでもって意味もなくパラパラやっている。

ハッと目がとまるデザインはなかった。目新しい情報もない。店内では新発売の商品かなにかをPRするアナウンスが元氣よく流れされている。誰も聞いていないのがわかっているだけに、その元氣さがかえってそらぞらしい。アナ

ウンスに耳を傾けるでもなく、雑誌の記事を読むでもなく、多佳子は何冊かパラパラやっていた。そうして、変わり映えしないなあ、そうつぶやいてからレジに向かった。

え？、なに？

部屋に戻ったとき、多佳子の目に見えないモノが飛び込んできた。部屋の灯りは点けたままで。それは、光が届いていないベランダの暗がりになっていた。明るいところからでは姿がよく確認できなかった。しかし、暗闇の中に浮かんだ二つの光が、なにか動物らしきモノがそこにいることを教えていた。多佳子と同じように、ベランダのそれも凍り付いたようなに見えたが、次の瞬間には視界から消えた。

暗がりからこちらに向けられていた二つの光、それが身を翻して消えるときに視界に残ったふさふさしたハタキ条のもの（きつとシッポだ）、それだけが

記憶に残っている。あとは、いつもと変わらない自分の部屋である。ノラネコかなと考えてみた。けれどもマンション4階にある部屋なのでネコが入りこんでくるとは思えない。それに、どう思い返してみても、あれはネコのシツポなんかじゃない。

ベランダに出てみたが、暗すぎて分からない。多佳子は部屋に戻って、机の引き出しを開けた。そこにはLEDのハンディライトが入っている……はずだった。

あれ？

そうなのだ。モノが消えるのは、いつもこういうタイミングなのだ。数日前に使ったのだけ見あたらない。また使ったきりで放りだしてしまったのだろう。きつとりビングのどこか、雑誌の下にでも隠れているに違いない。

押入の中には、旧式で大きな懐中電灯が入っているのは知っている。でも、

それをひっぱりだしてくるのも億劫だった。

どうでいいや、見なかったことにしよう、そう多佳子は考えた。

万紗子が失踪したらしい。出勤すると雰囲気は妙にピリピリしていた。何だろうと思っていたが、そういうことだった。チーフ宛にメールが届いていて、「やめます、お世話になりました」と書かれていたというのだ。チーフも最初は冗談と思っていたらしいが、始業時間になっても出勤してこないから自宅に電話を入れてみると、母親がでて、昨晚から戻っていないと慌てているのだという。

断るに断れない方面から頼まれて机をあてがっていただけとはいえ、一応は

社員待遇になっている。いなくなったことに重点を置くなら、本気で心配しなければいけないところだ。でも万紗子の場合にはちよつと事情が違う。とにかく手に負えないくらいのお天気屋なのだ。どうせ、ちよつとした気まぐれで飛び出しただけなんだろう。お腹が減ったら帰ってくるんじゃないの、その程度に思つておいてもいいのではないか。

あるいは、辞めますという内容をメールで伝えてきたという点に重点を置いたなら、まったくの笑い話だ。どうでもいい書類の整理とか、お使いとかなら、多佳子も時々、任せてはいた。けれどもその程度のことですえきちんとやってくれるかどうか心配だった。責任のある仕事などはとも任せられたものではない。それでも曲がりなりにも社会人だ。仕事を辞めるというのなら、それ相応のやり方がある。イヤになったからという、単純にしてバカバカしい理由だったとしても、しかるべき形を整えるのが社会人だ。それを、大学のサークルをやめるみたいに、メール１本で済ませようとしているんだから、笑つてあげられない。きっと「辞表」なんて漢字は、書き取りのテストでも書いたこと

がないのだろう。

自宅の方では、娘がいなくなって慌てているのだろうが、チーフはメールで辞めると言つてきたことに苛つているようだ。多佳子の場合は、どちらでもなかった。同じ職場で机を並べていた人間が消えたのなら、普通はポーズだけでも心配する素振りをするところだ。でも消えたのが万紗子なのだから、心配するだけ無駄と思えた。メールの件についても、なるほど万紗子らしいと言うよりなかった。

「ヤバいオトコに騙されてついて行っちゃったんじゃないの」

「かもね、あの子、最近、新しい彼氏がどうの言つてたもんね」

「マサコの言つてた彼氏って、そのスジのヒトなの？」

「ねえ、だったら、メールも怪しいんじゃない？ よくあるじゃない、メール送ったのは犯人だったっていうの」

「やだ、犯人って何よ、もう事件にしてるの？ 殺されちゃつてるわけ？」

「あつ、そうか、じゃあさ、モデルにしてあげるとか言われて、あっち系のプロダクションに連れていかれたっていうのはどうかな」

万紗子の件は、その日のうちに他の部署でも噂の種になっていた。多佳子が立ち寄ったとき、給湯室では、若いOLたちがキャッキヤツと楽しそうにおしゃべりをしていた。そして多佳子の姿を認めると、バツが悪そうに会釈して口をつぐんだ。

そっちの方が面白いんだろうな、と多佳子は考えた。いきなり辞めてしまうのも、それをメールで告げるのも非常識に決まっている。しかし多佳子には、そういうのも万紗子らしいとは思えなかった。だから若い女の子たちが盛り上がっている方向は少しも考えていなかった。

（アンタたち、週刊誌の読み過ぎなんじゃない、アタマ腐ってるよ。）少しくらいの軽口は挟んでみたかった。でもそんな言葉が口を衝いて出てくるより

先に、そそくさと立ち去られるとなにもできない。

いつものことだ。露骨に避けられているわけではないのはわかっている。でも、最初の一言が出てくるのに、他人よりほんのちよつとだけ時間がかかる。そのわずかな遅れが重たい空気になって相手に伝わってしまう。言葉の準備が整ったころには、もう相手はいない。

多佳子はコーヒーマーバーからお湯だけをカップに注いだ。そして少し冷ましてから唇を湿らしてみた。

「ああ、いい、うう……」

声が出ないわけではない。そんなことはわかっている。ミーティングで発言しなければならぬときには、きちんと喋っている。雑誌の広告で、担当者としてクライアントにデザインコンセプトの説明するときだって大丈夫だ。あらかじめ準備され、きちんと整理されている言葉ならすぐに出てくる。でも、そ

れとは違う。もっと簡単な、単純な、その場だけの言葉はいつも一步遅れる。頭の中では会話が進んでいるのに、実際の言葉がついてこない。内気で控えめな女の子でいられたころなら、まだよかった。でももうそんな年でもない。気が付くと、いつの間にか、高いバリケードの内側でひとりっきりでぼつねんとしていた。

席に戻ると、チーフの姿が見あたらない。ミーティングの時間なのに、万紗子のことなのだろうか。本人を心配しているというよりも、彼女を押しこんできた相手（大切な取引先だ）との関係があるから、幹部のところへ報告に行つたのだろう。ことはちよつと面倒な方向へ進んでいるのかも知れない。だとするとミーティングはお流れになるはずだ。多佳子がそんなことを考えていると、隣の席の女の子が、申し訳なさそうな小声でささやいてきた。

「あの……、資料は机の上へ置いておいてくれと、チーフが、……」

（そんなに恐縮して言うようなことでもないでしょ、普通のメッセージなんだから）。頭の中だけでそう返しておいて、多佳子は黙つてうなづいた。そして午前中に出力しておいたデザイン案をファイルケースから取りだしてみた。手描きのラフは三日前のミーティングで目を通してもらっている。それを改めてコンピュータで作成してきただけのものだ。他に頭が行っていると、チーフは真剣に検討したりはしないだろう。他のスタッフだって、多佳子の出すデザイン案に口を挟んだりしない。「エグゼクティブデザイナー」なんて仰々しい肩書きが名刺についているからだ。だったらミーティングなんかしても同じじゃない。あとはライターが書いてきた記事をはめ込んでお終い。このまま印刷所にまわされてカラーカンパになって出来上がり。

悪い出来だと思っているわけではない。でもなんか陳腐だなといった思いは残っている。このままで雑誌の見開きになってもおかしくはない。でも手

を加えられることなく通ってしまうと、どうでもいい仕事なのかなとも思えてくる。エグゼクティブかなんか知らないが、結局はだれがやっても同じようなものにしかない仕事ばかりなのだ。美大にいて、広告業界を志望していたころには、時代を映し出す広告を作ってみたいなんて、大きな夢もあった。世の中の空気を切りとったキャッチコピーというと、その言葉ばかりが注目されがちだが、それを効果的に印象づけるレイアウトなり、タイポグラフィなどのデザインがなくては始まらない。むしろ、そうしたデザインこそがコピーを生かす力の源なのだ。学生コンペで表彰されたときには、そんなことも思っていた。業界のトップランナーになって事務所を構えている姿も空想していた。しかしそれも昔の話だ。希望どおりデザイン系の会社に入ることはできた。でもスポットライトの中心とは縁のない仕事ばかりの日々が続いた。入社したところと肩書きは変わっても、与えられた作業を事務的に片づけるのは変わらない。以前ならいろいろな意見がもらえるように複数のデザイン案を出してみたり、疑問点を見つけて書きつけたこともあった。でも期待していた反応は返ってこな

かった。最近はそのようなことをする熱意もない。機械が規格品をペッペツと吐き出すように処理していくのが求められているすべてだった。

P M 8 時。いつもと変わらない時間にマンションに帰り着いた。そしていつものようにコンビニでの買い物を済ませ、これもまたいつもそうしているように、ポストに押しこまれていたチラシを廊下のゴミ箱に捨ててからエレベーターに乗った。

ふう

多佳子は小さくため息をついた。のろのろと移動する表示板の数字を見つめながら、今日もなんにもない一日だったなあと考えた。4階について扉が開くまで万紗子のことはまったく頭から消えていた。それでも扉が開いたのが、なにかの弾みにでもなったのかのように、万紗子の名前がひらめいた。

（ああ、そういえば万紗子がいなくなったんだっけ）。家族にすれば、とんでもない出来事なのに決まっている。チーフは管理責任が問われかねないから慌てているのだらう。他の部署の女の子たちには、おしゃべりにちよいどいいオモチャだ。それじゃ、私の場合はどうなんだろう。家族や彼氏といった親しさはないし、チーフのように立場上の問題があるわけでもない。でも同じフロアで机を並べていたのだから、面識もあれば会話（必要最低限のことだけだったけど）も交わしたことがあった。他人以上友だち以下ってところだ。なのに、どこかとても遠いところでの出来事のようにしか思えない。多佳子さんは冷たいよ、誰かがそんなことを言ってくれたら違ったかも知れない。でもそんな人もいない。

（冷たくないよ。だって、こんなにも考えてるんだから）。エレベータを下りて、廊下の角を曲がるまでの五六メートルほど歩く間、確かに万紗子のことを

考えていた。多佳子は、頭の中で会話を組み立ててみた。タカちゃんって冷たいんだね。今度はちよつと親しげなヤツがそう言ったような気がした。（だから言ってるじゃない、冷たくないよ）。多佳子、お前クールに出来てるなあ。男の声だ。男から名前で呼ばれたことなど、もう忘れてしまうくらい昔の話だ。ふん、多佳子は鼻であしらうように、その声を無視した。

あつ

廊下の角を曲がったところで、多佳子はその姿を認めた。ちょうど多佳子の部屋の前あたり、首を後ろに向けて多佳子の歩いてくる方を見ていた小動物は、多佳子と視線が合うと走って逃げ出した。この前のときと同じように、ふさふさしたハタキのようなシッポが確認できた。それだけではない。廊下の灯りがその姿をはっきりと照らしていた。胴長で白っぽい毛色（そう見えた）のそれに対して、ほとんど直感に近いかたちで「イタチ」という言葉が頭を過

ぎった。

部屋に駆け込んでコンビニ袋を放り出す。押入を乱暴を開けて懐中電灯を取り出す。電池がなくなっていないことを確認する。そうして、ふたたび廊下に出て、それが逃げていった方向へ行った。廊下の灯りが届いていない暗がりをあちらこちら照らしてみたり、非常階段の踊り場に出て中庭の方向も照らしてみた。なにもいない。

アタリマエか

相手は疾走していった動物である。押入から懐中電灯を取りだして電池の確認をするのを待っていてくれるはずはない。それでもしばらくは方々を照らしてみた。やっぱりなにもいない。わかりきっていることだ。

多佳子はいないのがわかつている相手を探すことをあきらめた。部屋に戻ると、ドアを開けてすぐの廊下にはコンビニ袋から飛び出したスナック菓子やパ

ックの牛乳が散らばっていた。多佳子はそれらを拾い上げた。ものすごく慌てていたみたいだ。自分でも可笑しくなる。

どうしてなんだろう？

なんだったんだろう、ではない。一瞬、頭を過ぎった「イタチ」という言葉、そっちの方に意識は向いていた。「イタチ」という言葉がひらめいたのは間違いない。でも多佳子には、イタチを意識して眺めた記憶はなかった。生まれてこのかた、身近なところにイタチがいた時間などなかったはずだ。「イタチ」という言葉は知っていても、それがどういう形をした動物なのか説明してみろと言われると、しどろもどろになる。その程度の知識しかないのに、どうしてイタチだなんて思ったのだろう。

コトシ

枕元でなにかが倒れたようだ。神経がたかぶっていたのか、多佳子はその小さな音で目を覚ました。夢を見ていたらしい。夢を見ていたのだとわかるまで、しばらく時間を要した。それでも次第に意識の焦点が定まってくると、ため息が一つこぼれた。首のまわりや脇の下が汗でじっとりしていた。後味の悪い夢だったようだ。

「一人いなくなって忙しくなると思うけど、みんな協力して頑張ろう」

夢の中でチーフが言った言葉だ。多佳子の記憶に残っているのはこれだけだ

った。ほかに、なにかつかみどころのないもやもやしたモノがある。でもそれはよくわからない。布団に入ったまま、多佳子は残された断片の組み立てにかかった。おそらくミーティングの中の言葉だ。セリフの前にどんなストーリーがあったのかは思い出せない。でもきっと万紗子の話だったに違いない。それにしても、チーフの口調は誰かの寿退社をうけて言っているようで、万紗子がいなくなったのをなんの不思議とも思っていないように聞こえた。他の人たちもみんな同じように考えているようだ。った。

人ひとりいなくなるなんて、実はありふれたことだったんだ、なにも自分だけが冷たいだなんて言われる筋合いのものなんかじゃないんだ、いや、そうじゃない、夢の話だから勝手に都合にいいように書き換えているだけなんだ……

いま何時なんだろう……あれ？

起きあがって時計の方を見ようとしたとき、多佳子は身体が動かなくなっ

いるのに気が付いた。起きあがろうとすればするほど、強く締め付けられている。ホラー系のテレビ番組などでよく言われる金縛りについては、多佳子は何度も経験していた。疲れて帰ってきて、ベッドに倒れ込むように眠ったときなどによく起きる。あれはホラーでもなんでもなくて、中途半端に頭の方だけが覚めて、隅々の神経が眠ったままになっているからそうなるのだということも知っていた。だから怖いと思ったこともない。でも、このときは、いつものとは違っていた。身体がこわばって動かないというのではない。他からの力で押さえつけられているような感じなのである。多佳子が知っている金縛りなら、意識の方も朦朧としていて、またかとおんやり思うだけだが、今はなかば引きつった顔の自分が見えている。覚めている、もう覚めているって。頭の中でそんなことを叫んでいる。

コトン

枕元でなにかが倒れた。ジリジリとした焦りの感覚が大きくなっていく。枕元になにかいる。でも見ることもできない。まったく動けないのだ。イタチだ。直感がそうささやいた。数時間前に仕入れたばかりの情報がよみがえってきた。

逃げていった小動物に対して、とっさにイタチだと反応してしまったのが気になって、ウェブサイトをいくつかまわってイタチ関連の情報をチェックしたばかりだった。その結果、生物学的な知識の整理もできたし、数点の画像から具体的な姿もイメージできるようになった。最近ではペットとして飼われていることも知った（もしかすると近所に飼っている家があって、そこから逃げてきたヤツなのかも知れない）。「イタチ」という言葉で検索をかけて、ヒットしたページをランダムに読んでいたのだが、中には年をとったイタチが妖怪になるとかの話を紹介しているサイトもあった。

多佳子の頭の中を、そうした情報が入り乱れて過ぎていく。枕元にいるのはあの逃げていったイタチだ。とあるページに、土手のようなところに前足を

置いて立ち上がったように見える写真があった。いま枕元にいるのは、それと同じような姿勢で、床から立ち上がって頭をつきだしているイタチに違いない。ベッドの端に前足を乗せて、じつとこっちの顔をのぞきこんでいるんだ。

見ることのできない枕元の様子が形を持ち始める。なにも見えない暗闇に対して、少しずつ目が慣れてくるような感じた。銀色にも見える毛色、ほんのりと湿ってツヤを帯びた鼻先、黒く吸い込まれそうな眼球……、いや、イタチにしては大きすぎる。イタチはそんなに大きいはずがない。でも、そこにいるのはイタチでなくつちやいけないんだ。深夜のコンビニでレジカウンターの奥からバイト君が頭をつきだして、店に入ってきた多佳子の姿を確認する光景がオーバーラップした。同時に、見えないはずのイタチの顔が人間の輪郭を持ち始めた。膝のあたりから太股の内側へなにかはい上がってくる。鳥肌が立つ。多佳子、お前クールに出来てるなあ。どこかで声が聞こえた。一瞬、視界が真っ白になった。そしてすべてが消えた。

コトン

枕元で聞こえた音に反応して多佳子は目を開け、ゆっくり起きあがった。夜はまだ明けていなかった。液晶の表示が示す時刻は4時7分になっている。枕元ではLEDのハンディライトが倒れていた。こんなところに放り出していたんだっけ、そう思いつつ、多佳子はライトを点けてみた。白い光の中に見えたのは、いつもと変わらない多佳子の部屋である。なんにも変わっていない。自分もここにいる。多佳子の目から涙がこぼれた。消えなかったんだ……あのまま自分も消えてしまったらよかったのに、そう本当に思っていた。

メールなんか出したりしないから正真正銘の蒸発だ、そうならみんなが騒いでくれる、そんな様子を、どこか遠いところから眺めてみるのも悪くない。多佳子は夢のストーリーを考えながら、ハンディライトが照らしだす壁をじつと眺めていた。灰色の壁はだれもないステージにあてられたスポットライトにも見えた。

き
消える

こじようゆう
古城 悠

2015 年 1.月 1 日

© 古城悠

発行所 office.34

〒 603-8083 京都市北区上賀茂向繩手 2-2-12